

音の散歩路

～変わりゆくオーケストラのポートフォリオ

～子どもたちの人生の散歩道に登場した世界のマエストロ、大野和士～

武蔵野音楽大学 音楽学部

講師

小倉多美子

■定期公演とリージョナルな活動の両輪が ポートフォリオを飾る時代に

2016年の夏、「日本音楽芸術マネジメント学会」研究会に各地のオーケストラの楽団長、事務局長が集まり、オーケストラのマネジメントの現状を語り合うシンポジウムが開かれた。高い入場率と地域に愛情を抱かれる地方オーケストラにはやはり、独自のカラーを鮮明に打ち出す発想と、マネジメントの努力が必需となる。山形新聞が県民シェア率54%で、1面トップにコンサート案内が出、人間関係が濃密で口コミをどう生かすかがキーだという山形交響楽団。50人の規模ながら、古楽器のレプリカを用いたブルックナーが大好評を博している。事務局長の西濱秀樹は「オーケストラのメンバーが、今の自分たちの色を作ろうと言い出し、音楽監督の飯森範親も賛同した。古楽器による透明感のある少人数のブルックナーを塑像し、150回ほどを同じメンバーで演奏し、会員の方からお米やさくらんぼの差し入れもある」という山響は現在、入場率95%、フェイスブックのアクセス数は35,000にのぼるといふ。コンサートの冒頭であろうと休憩後であろうと、メンバーが舞台上に現れた時点から拍手が起こる群馬交響楽団、創立指揮者・朝比奈隆の時代から地元関西

経済界と深い縁を結び、初代理事長が住友銀行頭取、その後関西電力会長が19年間、そして現在三井住友フィナンシャル・グループ会長が理事長を務める大阪フィルハーモニー交響楽団など、歴史も様々に根を張り愛されている。世界的にも高齢化が進むいま、特に高齢の愛好家の多いクラシックゆえの危機感は、どの楽団も抱える悩みであろう。オーケストラ・アンサンブル金沢の床坊剛は「オーケストラ文化のなかった所に、今や拍手の温かさにも変化がみられる。しかし高齢化に伴い定期会員が減っている」と、創立28年目の2016年、第三者評価も取り入れブランディング力や若い層の開拓に腐心している。ゲスト・コメンテーターの岩野裕一が「どのオーケストラも地域から愛されているのを感じる市、その町にオーケストラがある価値をもっとアピールしていいのでは」と強調した。そして基調講演をした文化庁文化部長・内丸幸喜は、自身の頭の中にあるものと前置きしながらも、「ナンバー・ワンを目指すものやオンリー・ワン（そこにしかないもの。例えば歌舞伎等）を支援し、多様な活動を支援してきたが、ここ数年、それだけではないものが求められている。ナンバー・ワンやオンリー・ワンが、地域のGDPを生む力となり、また社会の課題を解決していく力となる——そういう力が求め

られていくのではないか。活動に対するこれまでの支援に加え、色々なことをしようとしている組織への支援も考えてゆきたい」と、世界水準の文化芸術を目指す支援に加え、地域社会における力となる文化創造への意識を鮮明に語ってくれた。オーケストラ自身も、我が楽団の存続という枠を超え、クラシックの音楽文化の未来を拓くという大きな意識のもと、各楽団が独自のエデュケーション・プログラム、リージョナル・プログラムを活発化させている。エデュケーション・プログラムの先駆的活動を繰り広げてきた日本フィルハーモニー交響楽団「音楽の



2016年11月22日・台東区立東泉小学校での第18回「都響マエストロ・ビジット」1時間目。大野和士の指導に合わせて指揮を体験する子どもたち
撮影：堀田力丸

森」に登場したマイケル・スペンサーが、ファシリテーターという存在を気づかせ、上野学園など今や大学にも養成講座が開講されるに至っている。メンバーによるアウトリーチは各楽団、現在盛んに行っている。それに加え、子どもたちの育成も、組織的に取り組む楽団も少なくない。2013年から3年間、八王子市学園都市文化ふれあい財団とパートナーシップ協定を結び、ユースオーケストラや市民合唱団の育成にも尽力した東京交響楽団。新日本フィルハーモニー交響楽団では、本拠地すみだトリフォニーホールの名を冠する「トリフォニー・ジュニア・オーケストラ」に恒常的にトレーナーを送り、プロのオケ・マンによる密接な指導が同団の1つの特徴となっている。学校へのアウトリーチは、各楽団盛んに行われている。中には、世界的指揮者がじかに指揮法を教えてくれる豪華なアウトリーチもあり、子どもたちの人生にとって、印象深い音楽の散歩道になったことであろうと思う。

■大野和士が登場した第18回「都響マエストロ・ビジット」

東京都交響楽団が続けている「都響マエストロ・ビジット」には、今まで、エリアフ・インバルが東京大学音楽部管弦楽団で「特別講義」を行うなど、贅沢至極なアウトリーチが展開されてきた。去る2016年11月22日には、



東泉オーケストラを指導する大野和士 撮影：堀田力丸

同団の音楽監督の大野和士が、台東区立東泉小学校に登場した。大野和士は2018/2019シーズンからさらに新国立劇場オペラ部門芸術監督にも就任予定の日本が世界に誇る指揮者の一人。大野の登場とあり、マスコミ各誌も取材にあっていた。都響の首席トランペット奏者・高橋敦、ヴァイオリン奏者・大和加奈、クラリネット奏者・勝山大舗を率いて現れた大野和士は、「きょうは皆さんにも指揮者になってもらいます」と話しかけ、まず、「ハンカチを投げますので、目をつぶって、ハンカチが床に落ちたなと思った時に、拍手してみてください」とやってみると、子どもたちの拍手がほとんど合う。「どうして合うんだろう？指揮者というのは、距離が離れていても大勢の人たちと一緒に出てもらわないとならないんですね」と、今度はボールを使い「悪いやり方と良いやり方で、皆さんに手を叩いてもらいますね」と、予想のつく投げ方と、突然急に投げ出す方法で、子どもたちを巻き込んでいく。そしていよいよ世界のマエストロ、大野の指導が、2拍子から始まる。大野が自ら「1はまっすぐ



大野和士のお話に、前で指揮するお友だちも聴いているお友だち 撮影：堀田力丸

に下ろし、2で上げて」と基本的な動きを示したあと「振りたいお友だち、前に出てきてください」と募る。大野が弾く《トルコ行進曲》に合わせ振る子どもたちに、「(見ている)お友だちの目を見て振ってみて」、そして次は「小さく始めて大きくするにはどうしたらいいでしょう？」と、指揮棒の振り方を教え、「聴いている皆さんも、指揮棒に合わせて手拍子してみてください」と、*p*になったり*f*になったりするピアノに合わせて指揮棒を振る子どもたちに合わせて、見事に手拍子の音量も増減する。大野が



大野和士指揮・東泉オーケストラで、最後に「軽業師の踊り」を演奏も笑顔が絶えない

撮影：堀田力丸

インタビューすると「面白いです！」と子どもたちから元気な声が返ってくる。次は3拍子。「3拍子はどうしたらいいんだっけ？ そう、三角形を描けばいいんだよね。大事なのは、1拍目を左に出すこと。それでは、またお友だちに出てきていただきましょう」。もう、ここからは、2度目であろうと3度目であろうと子どもたちは「ハイ！ハイ！」と積極参加。「今度はどんどん速くしてみましょう」「1の次の2、3は軽く。4小節目の頭のみ大きく振り、あと軽く振ってみよう」と、段々レベルアップしていく。インタビューに応じて「サイコーです！」(日本シリーズの大谷選手のマネか)と、「特別授業」はもう笑い声に包まれている。4拍子では、「直前の4拍目で息を吸うと、オーケストラも全員出られるんだよ。そしてせっかく息を吸うので1拍目気合いを込めて」。「今度はクレッシェンドしてみましょう」と、左手の技術を教えてみる。「見ているお友だちは、指揮に合わせて声を出してね」。

特別授業2時間目は、東泉小学校4～6年生(60名)で構成された東泉オーケストラと都響メンバーによる合同セッションで、リムスキー＝コルサコフの歌劇《雪娘》より「軽業師の踊り」の演奏の練習。「練習番号Ⅸのホルン、トランペット、トロンボーン、Ⅴの2つ前、最後の2小節、クレッシェンドできますか？なぜなら、最初のフレーズに戻るのだからⅤの3小節前、ヴィオラ、弦に弓を乗せてからスタッカートして」等々、本格的な指導が細かに繰り返された。練習後、最後にもう一度演奏されたとき、前の方で聴いている女の子たちは嬉々として指揮しながら聴いている。指揮の体験授業でも、大野の指導を懸命に聞いて腕を動かす子どももいて、音楽の世界、新たな世界に接した興味と喜びが、全身から伝わってくる。「美しく生きていけるように。その傍らに音楽がありますように」という言葉を子どもたちに贈った大野和士。子どもたちの人生の散歩道に、大きな喜びを残したビジットになったことであろう。